小川　悟史
工藤　裕之
住谷　覚

石津　菜央
坂井　彩子
都甲　能理子
長沢　淳子

設計演習Ⅱ

課題
プログラムの変容と再構築
Place for Performing Arts
（舞台芸術のための場）

4年

担当＝
高　俊民

小川　悟史
工藤　裕之
住谷　覚

今回の敷地である代々木公園は、都市・東京の中における数少ない大規模公園の一つです。その中に様々なアートを演じる空間を創り出す方法として、1.［敷地全体に各施設を分散させる方法］、2.［場所をある程度限定して各施設を配置させる方法］の2つが考えられました。

1の方法は、公園と施設を一体化させるという前向きな発想と同時に、今までの〈公園そのものの純粋な役割〉が無くなってしまう（のんびり昼寝や日光浴が出来なくなったり、公園に来る人と施設へ来る人との動線があらゆる所でぶつかり、混乱を招くおそれがある）というものとなり、また、2の方法は、公園と施設を意識的に分ける事により、役割はハッキリするが、やはり公園と施設の一体感が薄れるというものとなり、どちらも決定打に欠けた案となりました。

そこで我々は再度検討した結果、1と2の各メリットを取り入れる中立案を取る事にしました。それは、［各施設（センター部・小規模群・中ホール部・大ホール部）は場所をある程度限定させて配置し、それら施設を既存の遊歩道に接する（交差する）様に配置し、各建築物を人の動線によって結び、また連続性を持たせる］というものです。

指導＝高　俊民

このユニットでの狙いはコンサート・オペラ・劇場・バレーなどの専用ホール（劇場）のデザインを直ちに追求することではなく、これらの舞台芸術を我々の生活にどのように採り入れ、より身近で楽しく鑑賞できるような「場」を創れるかを十分に問い、計画することにあった。

初めに、ユニークな事例としてボストン・シンフォニーの“別荘”とも言えるボストン郊外にあるTanglewood Music Centerの音楽鑑賞への精神と施設を研究した。

クラスを2～4人のティームに分け、劇場のみの検討に固執することなく各グループでディスカッションをし、新たに考えをまとめ、パーフォーミング・アートとさらにそれに関わる要素を採り入れたプログラムを再構築することにした。代々木公園を計画地と仮定し、複合施設のデザインに各ティームが挑んだ。その中で女子グループのINTS案に見られる周囲の環境を重視し、有機的な形態を用いる個性的でリリカルな提案もあった。

一方、SOK案は周囲の樹木をadhoc的なパーフォーマンスの場と解釈した反面、幾何学的かつ明快な形態で全体を構成した。“ノ”の字形の展示／展望ホールを貫通して、先に位置する二つのホールに導かれるが、興味深いところは各ホールに付属する中庭の存在だ。小ホール（700席）では観客席－レストラン－中庭－図書館－カフェへと空間を次々と融合できるアイディアが提案された。これは音楽を常に観客席に限定せず、劇場外の中庭に集う人々、さらに図書館やカフェまでへも音楽のよろこびが届く考えだ。また、大ホール（1300席）では劇場内部の周囲に中庭を介して回遊デッキがまわされ、観客席以外からも観覧できるアイディアが組み込まれている。

これら劇場外部への、あるいは外部鑑賞を可能とする彼らの考えは、Tanglewoodで見られるように建築の外部空間を積極的に利用してでも音楽をより多くの人々に楽しく届ける姿勢の理解からの発想であろう。すなわち、パーフォーミング・アートを鑑賞することは常に高尚なことではなく、時にはタキシードをまとっている人もジーンズを着ている人も、大人も子供も同じ音楽と空間を共有することによって、芸術をより身近に、デモクラティックに携われるという思想だ。

INTS案：石津・長沢・都甲・坂井ティーム
SOK案：住谷・小川・工藤ティーム